

これからの「進歩と調和」

中島 信也

なかじま しんや / 1959年福岡県生まれ。(株)東北新社専務取締役・CMディレクター。多数のCMの演出を手がける一方で東北新社専務取締役を務める。デジタル技術を駆使した娯楽性の高いCMで数々の賞を受賞。代表作は日清カップヌードル「hungry?」(カンヌ広告祭グランプリ)、サントリー「燃焼系アミノ式」「伊右衛門」、資生堂企業「新しい私になって」など。

四〇年近く前、今は国立民族学博物館の建つ広大な緑地の上に巨大な都市が出現しました。万博です。僕は地元千里ニュータウンに住む小学六年生でした。サルを見るために箕面の山頂近くまで自転車で毎日のように通っていた僕たちにとって、万博会場は目と鼻の先です。ただ、箕面のサルと違って僕たちの前には「入場料」という大きな壁が立ちただかかっていました。たしか子ども四〇〇円です。五〇円のプラモテルに歓喜し、二〇〇円が高額プラモだった時代です。四〇〇円は当時の僕たちにとつては大金でした。

しかし柵のなかから魅惑光線を浴びせ続けるカラフルな化物たちを前に指をくわえて見ているわけにはいきません。ほどなく夕方で入るルートが地元つ子のあいだに伝播していきました。会場の警備は厳重。ところが本会場から道を挟んだエキスポランド側のある一角は少し手薄だったようです。高い柵の下に通っていた一本の溝。子どもは僕たちはこの溝にぎりぎり入ります。ちょうど体を差し込むように地元つ子たちが次々に会場内に入っていたのでした。

そんなお祭りも夏の終わりとともに終了し、夢の建造物は次々と壊されていきました。そこに残った

のは広い広い緑地。そんな情景に対して一〇年ほど前までであれば「夢の跡」などとよびつつ、少し感傷的に昭和の高度経済成長時代を懐かしむことでこの文章を結ぶ事ができたでしょう。でもここへきてわたしたちの意識は大きく変わり始めています。わたしたちは今のペースで暮らしていくと必ず限界がやってくるという事実をつきつけられています。「成長」「破壊」と表裏一体であることも学んでいます。環境問題に対する関心は全地球的に高まっており、新しい道を模索しなければならぬ、という大きな宿題が課せられている今、高度経済成長とその象徴でもあったあのお祭りを頂点とする道にもう一度帰ることはできません。夢の建造物を緑の森に変えたことが「英知」として評価されるという新しい社会が生まれようとしているのです。

今回この原稿を依頼されて即座にあのお祭りの思い出がよみがえってきました。と同時にわたしたちは今、あのころ夢見ていた「未来」というものとはまったく異なった観点で「未来」を描こうとしているんだなあ、ということを感じました。そしてこの未来観の変化はむかしを懐かしむ感傷の産物ではなく、これからの「進歩と調和」をめざす希望に基づくものであると僕は信じています。

江口久名誉教授

庄司 博史

- 16 外国人として生きる
芸術活動からの発信、京香一さん
一日常化したフィリピン、パブリックなフィリピン
鈴木 伸枝
- 18 歳時世相編
⑥独立記念日
ビバ! メヒコ、ビバ! ユカタン
鈴木 紀
- 20 生きもの博物館
博物館のいたずら虫たち③
橋本 沙知
- 22 フィールドで考える
スイスの「頑固者」たちが
暮らす町
鈴木 七美
- 24 みんなく ウィークエンド・サロン
研究者と話そう
次号予告・編集後記

月刊



目次

SEPTEMBER 2008
月刊みんなく

9

- 01 エッセイ 世界へ世界から
これからの「進歩と調和」
中島 信也

02 特集 サンゴ

- サンゴと人間
印東 道子
- サンゴ礁の今
山野 博哉
- サンゴの白化と地球温暖化
茅根 創
- サンゴの上に住む
山口 徹

サンゴを使う

小林 繁樹

サンゴを調べる

三田 牧

08 モノ・グラフ モノに刻まれた出会いの記憶

一特別展「アジアとヨーロッパの肖像」の展示学
吉田 憲司

10 地球ミュージアム紀行 ミュージアムをめぐる

日本とイギリスのつながり
川口 幸也

11 表紙モノ語り ポイ・パウンダー

印東 道子

12 みんなく インフォメーション

追 悼

14 竹村卓二名誉教授

塚田 誠之